

第 25 回夏季ワークショップ案内文

<A コース> 西岡加名恵先生

今、学校のカリキュラム改善を進めることによって、子どもたちのウェルビーイングを高めることの重要性が注目されている。そこで本講義では、パフォーマンス評価を用いたカリキュラム改善の取り組みについて紹介したい。

具体的には、第 1 に、教科教育において、「本質的な問い」に対応するパフォーマンス課題を開発・活用することである。それにより、各教科の「見方・考え方」を身につけさせ、その教科を学ぶ意義を実感させることができる。第 2 に、ポートフォリオ評価法を用いて「探究的な学習」を推進することである。子どもたち自身が自分の学びの足跡を蓄積・編集したり、それらを用いて検討会を行ったりすることで、自らの学びのストーリーを編むことをできる。

近年では、大阪市立田島南小中一貫校における「『生きる』教育」に注目し、その実践をまとめる作業にも取り組んでいる。本講義では、「『生きる』教育」の実践についても紹介したい。

<B コース> 村山光子先生

通常学級に在籍する小中学生の 8.8% に、学習面や行動面で著しい困難を示す発達障害の可能性があることが調査により明らかになり（2022, 文部科学省）、独立行政法人日本学生支援機の調査によれば、全国の国公私立の高等教育機関に在籍する障害学生は 49,672 名、その約 20% にあたる 10,288 名は発達障害のある学生であることがわかっている。

このように初等、中等、高等教育機関に一定数存在する発達障害児・者の支援は、その年齢や発達の進度、環境や人生のステージによって異なるニーズがあり、支援の方法も異なる。また、発達障害児・者の支援は個別性が高く、それぞれにフィットした支援をどのように提供すべきか、支援者が戸惑うことも少ない。

本研修では、青年期における発達障害児・者特有の困難に着目するとともに、中長期的な視点にたって支援の見通しをもち、当事者の成長や次のステージに繋がる支援のあり方について、参加者の皆さんとともに議論し、考えたい。

<C コース> 森崎晃先生

ICT 教材を活用して、不登校状態にある、あるいは不登校ぎみの子どもたちの支援を行う、そうひと口に言ってみても、コトは容易ではないと、感じていらっしゃる方が多いのではないのでしょうか。

教材にはどんな種類や特徴があってどう選べばよいのか、支援対象となる子どもの何をみて状態や段階を判断すればよいのか、いやそもそも、何を目的に ICT 教材を活

用するのがよいのか——操作マニュアルを読んでも、あるいは各種のウェブサイトを
読んでも得られる情報ではありません。

本パートでは、ICT教材を用いた不登校支援の実践者でもあり、研究者でもある担
当者が、これまでの経験や事例を紹介しながら、「ICT教材を活用する目的（単なる
学習補充でなく内面の変容にもつなげる）」「ICT教材の種別と選び方（子どもにと
って取り組みやすいのは）」「子どもの状態や段階に応じた活用の方向性」といった
テーマで紹介を行い、参加者のみなさまからの質問も受け付ける予定です。

<Dコース> 土屋弥生先生

今回の研修では、教育相談における現象学的アプローチについてご紹介します。

教育相談においては、「目に見える」児童生徒の変化に注目し、客観的な情報を手掛
かりに児童生徒の状態を捉えるということは言うまでもなく重要ですが、一方で「目
には見えない」児童生徒のあり方をどのように捉えるかということが重要な課題である
と思います。

この課題に向かうためには、児童生徒理解を深め、児童生徒のアセスメントをより確
かなものにし、児童生徒自身も気づいていないかもしれない「見えない」課題を見抜く
ことが求められます。

研修では、児童生徒の「主体性」に注目し、現象学的な意味での児童生徒のパス
や雰囲気、気配を洞見する現象学的な教育相談の方法の重要性などについてお話し
したいと考えています。

<Eコース> 酒井久実代先生

フォーカシングを創始したジェンドリンの傾聴は、クライアントの話のポイントを一
つつ理解したままに言い返しながら聴くという方法です。この技法によりクライエ
ントの内面でフォーカシングのプロセスが進み、意味の創造（新たな気づき）が生じる
ことについて解説します。また、フォーカシングの発展型の一つであるインタラクティブ
・フォーカシングの“二重の共感のとき”という方法をご紹介します。この方法では、傾
聴の後に1分間の沈黙の時間を設け、その間にカウンセラーはクライアントの話を通
り返り、クライアントの感じていることを色や短い言葉、イメージで表し、クライエ
ントも自分の話を振り返り、それらをお互いにシェアします。これによりクライエ
ントの共感的理解が深まります。実際に短時間のワークを体験していただきながら、
フォーカシングに基づく傾聴や共感をどのように教育相談に活かすことができるかを考
えていきたいと思っております。

<F コース> 藤原和政先生

本ワークショップでは、学校教育に携わっておられ日々の教育実践を研究論文、もしくは実践論文としてまとめ、学会誌へ投稿してみたいけれども、「難しそう」、と思われる先生方を対象としております。ワークショップの内容としてまして、論文のテーマ設定、調査や実践結果のまとめ方、問題と目的や考察の書き方、などをご紹介します。そして、これらを踏まえて、ご自身が書いてみたいと考えられている論文のアウトラインを作成できればと考えています。そのため、ワークショップ当日に論文としてまとめたい内容を記したもの（箇条書きでも構いません）をご持参いただければと思います。このワークショップをきっかけに、ぜひとも論文をご投稿していただけることを願っております。